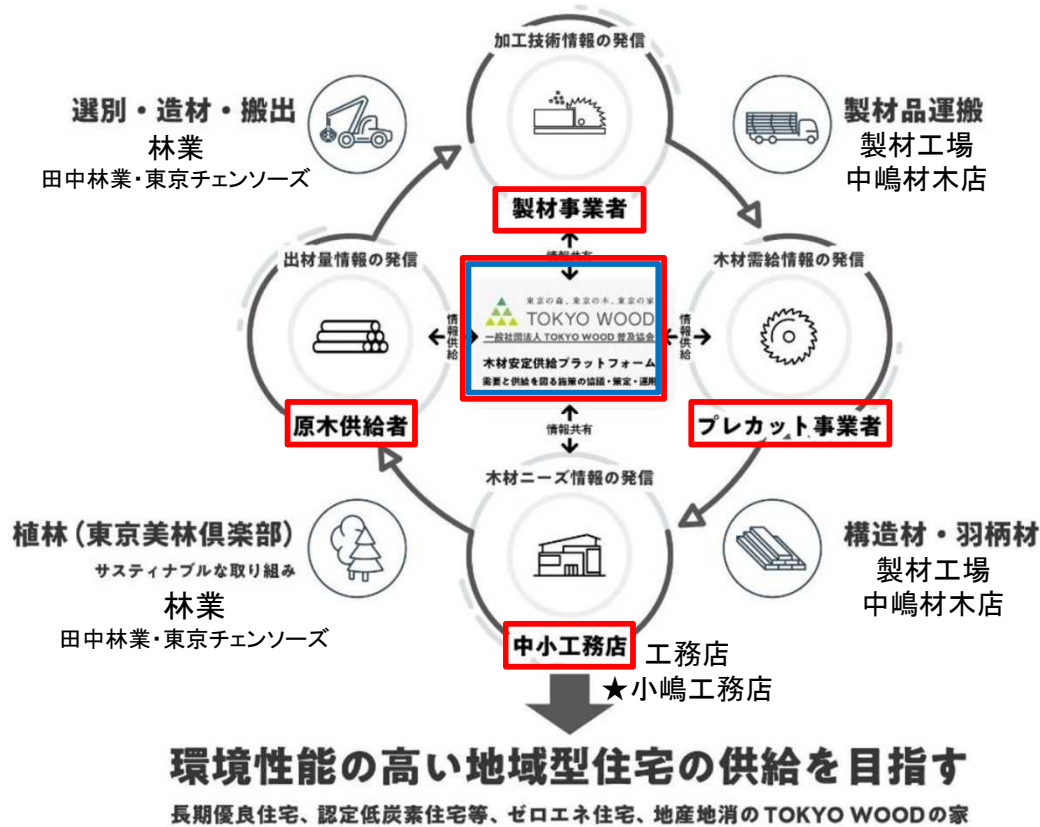


1. 全体概要



3. 取組の概要、成果

- 原木市場を介さない木材取引の標準化
土場からの調達試行を5回実施。
土場内での仕分け・ピッキングの効率化。
- 自給率アップの取り組み(中目木以上のスギ材の活用)
横架材用途で2度、杉の無垢梁を試作。
強度及び含水率データの蓄積。
含水率の精度を向上させるため、乾燥工程を改善。
- 杉の構造用梁材の乾燥工程レシピの検証を進め、従来「TOKYO WOODの家」の梁材に使われていた輸入木材を多摩産材の杉材に置き換えた。初めて使用する物件については、リスクもあるが工務店側でお客様より使用許可をいただける物件を選定することで、実証する段階へと進めることができた。
- 自給率アップの取り組み(B、C材の活用)
B・C材による集成材にて造作材の試作。(窓枠、幅木、階段材等)
- 地域材の産出量拡大の可能性を把握
勉強会を2度実施。課題を明確化するために、東京の森林・林業の現状について、講師を招いて普及協会メンバーで勉強会を開催した。



杉梁材の生産



桧集成材階段

2. 取組の背景、地域の課題

- 中小工務店の木材調達のほとんどは安価な輸入材に頼っており、輸入集成材の依存度の高い横架材は、ウッドショックにより欠品を招いた。
- 国産材にも影響が及び、原木・製品共に数量の逼迫、価格高騰が相次いだ。
- 杉材の木材乾燥は非常に難しく、日本国内でも住宅用構造材として好んで扱われている事例は少ない。
- 多摩地域の原木出荷量は他の木材産地に比べて少なく、ウッドショックにより一時的に2～3倍近くまで原木価格が高騰した。

4. 今後の取組、課題

- 横架材用途の製品(杉の無垢梁)は完成の見通しができ、12月から実物件で活用を開始する。
- 杉梁材の木材乾燥レシピは、まだ不安定で含水率を均一に低下させられていないため、引き続き製造しながら含水率の均一化を目指す。
- 団体内で杉の無垢梁の価格を協議し、外販を開始する。